美術部会

＜県研究主題＞
豊かに感じ取る力を高めることを重視し、生徒一人ひとりの資質や能力の
育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　本多　隆（川崎地区）

＜研究主題＞
生活を豊かにする創造する力を高める実践
～　さまざまな素材との出会い　～

１　提案内容

「美術での学習が生活に効果的に発揮されているか」という観点に着目し、生活を豊かに工夫しようとする手立てとして、美術の授業でさまざまな素材と出会わせることで、想像力の幅を広げ学ばせるという実践提案であった。学習の中で、はじめて経験する素材で表現することへの喜びや楽しさを経験させ、感性を高めていくことをねらいとした。

（１）　授業実践　「白抜き剤を用いた抽象表現」

基礎的・基本的な表現技法の習得と同時に、抽象的な発想や考え方を理解し、思ったことや伝えたい思いを、感じたままに素直に表現する手段として、抽象的な技法を知ることは豊かな感性を高める重要な要素である。また、さまざまな表現技法を知ることで、発想が表現につながる手段は大きく変わる。先人の画家たちがどのような思いで、抽象的絵画に思いを込めて表現してきたかを学び、色や模様等から自分の作品テーマに思いを込めて、自由に表現する楽しさや、喜びを感じさせるにはどのような授業づくりをしていくべきか考えさせられた。

和紙に墨、彩液を使用し、モダンテクニックの技法を用いて表現しやすいように工夫されていた。そのなかで起きる和紙独特の滲（にじ）みやかすれ、ぼかしなどの性質を生かし表現方法のよさや色合いのよさを感じながら、自分だけの抽象表現を目指していくというものであった。

①　課題の把握と鑑賞（50分）
・現代美術への移り変わりや抽象絵画の生まれた経緯、活躍した画家を知る。
・抽象絵画に生かせる技法（モダンテクニック）を学び発想につなげる。

②　課題の把握と表現の発想・構想（50分）
・白抜き技法の生かし方を理解する。和紙や彩液の特性を生かして、滲みやぼかしの効果を有効に出せるように練習する。

③　制作（100分）
・自分の発想・構想のイメージを、学習した技法を生かして効果的に表現する。

④　鑑賞（50分）
・作品を展示し、互いに作品を鑑賞しあう。展示された作品を見て、作者の思いや意図を感じ取る。

（２）成果と課題

【成果】
・和紙の特性を生かし、抽象表現する喜びや楽しみが感じられた。
・授業を通して、描いた作者の意図を考え、感じることへの面白さを実感することができた。

・さらに表現を工夫したり、技法がうみだす雰囲気やイメージを掴み、表現したりすることができた。

【課題】

・実際にやってみてうまくいかなかった生徒への手立てとして、練習が必要である。

・研究テーマを推進していくには、教科研究だけにとどまらず、学校全体で関わることが必要である。

2　協議内容

・モダンテクニックを評価する際は、どのように評価しているのか。

→素材の特性を生かす技法を選択・判断させ、抽象表現として評価をつけた。ワークシートを活用し、その時間の感想や試行錯誤している様子などを授業内で見取り評価した。

・今回の授業から更にどのような題材に発展していくのか。

→半立体の作品づくりに発展させるなど、次の授業につながるようにしたい。

・アイディアスケッチの段階で色設定はどのように決めていったのか。

→色鉛筆を使用する生徒もいた。

・生徒はどんなことを感じ、学べたのか

→着色した際の滲み、ぼかし具合などをコントロールする技法面での難しさや魅力を実感した。

3　まとめ

子どもたちの感性や創造力を引き出すために、素材の特性を生かして、いかに表現させるかを研究されていた。また、抽象表現の偶然にできるもののよさや、かたちや色の魅力を通して感性を高める授業として参考になった。美術の授業を通して生活を豊かにし、自分の思いや価値意識を鑑賞だけではなく、表現することによって見いだせる授業づくりがなされていた。

提案２　　提案者　吉野　敦子（県央地区）

＜研究主題＞

鑑賞の能力を育てる指導の工夫

―『ひまわり』の中に自分をみつける―

1　提案内容

鑑賞について、学習指導要領においても「美術作品などの良さや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する指導を行う。」とある。また、「鑑賞は単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくりだす学習である。」と記されている。しかし、鑑賞の授業において、生徒が感じ取り味わった感情を表現する手立ては文章によるものが多く、結局は文章を上手に書くことが出来る生徒が鑑賞の能力が高いとみなされる傾向にある。そこで、作品全体を鑑賞して感想を書く授業ではなく、文章を書くことが苦手であっても、感じたことを表現しやすいように、作品に対する作者の心情や制作の意図、表現の工夫などを自分自身と照らし合わせて考えられるような鑑賞の授業を行いたいと考えた。また、表現及び鑑賞の活動において、共通に必要となる資質や能力としての〔共通事項〕から、「イ.形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること」と関連づけて取り組むこととした。

（1）　研究実践

①　題材名　『ゴッホの気持ち～ひまわりの中に自分を見つけよう～』

第一学年「Ｂ鑑賞（１）ア」「共通事項（１）イ」

②　題材の概要

ゴッホの『ひまわり』を題材に鑑賞授業を行う。ゴッホはひまわりを題材にした作品を多く制作している。その中でも、現在日本の損保ジャパン東郷青児美術館が所蔵する『ひまわり』を鑑賞し、花瓶にいけられている１５本のひまわりのうち《今の自分》の気持ちや、状況に当てはまるひまわりの花を１本選び、その理由を発表する。次に、友人に当てはまるひまわりの花を１本選び発表する。その後、ゴッホについてや、ゴッホの作品について考える活動を計３時間で行う。

③　題材の目標

『ひまわり』の絵を鑑賞し、自分に当てはまる花を選ぶことを通して、作者の心情や制作意図、表現の工夫などについて考える。また、全体の調和についても想いを馳せ、どれが欠けても成り立たないよさや美しさを感じ取る。

（2）成果と課題

【成果】

・発表後に質問をし、相手の考えをより深く知ろうとする姿もみられ、見方や感じ方を広げることができていた。

・文章を書くことが苦手な生徒のために、箇条書きでも良いと伝えたことから、理由や考えを書いていない生徒はほとんど見られなかった。

・鑑賞した後に作者や作品について学習したところ、ワークシートの記述には、「もっとゴッホについて知りたい。」「このような鑑賞の授業をもっと行いたい。」という感想が多くみられ、自分の中に新しい価値を見出し、「今後の表現に生かしたい。」というような気持ちの高ぶりが感じられた。

・友人に当てはまる花を選ぶために、その理由を考えることによって、他の生徒を深く知る機会ともなった。また、友人が自分のためにその花を選んだ理由を聞いて、自分について見つめ直す機会となり、さらなる友人関係を構築する一助となった。

【課題】

授業そのものは楽しく進められたと思うが、《今の自分》や《友人》に当てはまるひまわりを選んだ後、それを全体の調和や、作者の心情に結びつけるまでにはつながらなかった生徒がいた。１年生ということもあるが、もう少し鑑賞が深まるような課題の提示の仕方、展開の仕方に工夫が必要だと感じた。

２　協議内容（質問と回答）

・共通事項をどのように取り入れたのか。

→共通事項ありきではなく、鑑賞の能力をみとるためにワークシートを作成した結果、色や形、イメージなど、共通事項がポイントとなった。

・鑑賞が深まったとはどのような状態をいうのか。

→学びをどのように生かして行くかによって深まりがわかる。そのため、今の時点ではわからない。しかし、作者がどのような状況だったのか想像している子は鑑賞が深まったといって

いいのではないか。

・２，３年生になった時にどのような手立てで子どもの力を伸ばしていこうと考えているか。

→歴史や作品に書かれているものなど、どのような視点で鑑賞を行うかも含め、生徒の様子をみて考えていく。同様の授業を３年生になって改めて行ってくことも考えている。

３　まとめ

鑑賞の充実のために行われた良い授業であった。良さや美しさを味わい、自分なりの価値を見出すことができている。美術の中で、自分と友人の考えの違いを意識する道徳的な部分を考えることができた。互いの意見を受け止め合いながら「どうしてその花なの？」などという発言が自然と出る授業環境がつくられていた。これまで文章力が問題となり、鑑賞の能力を伸ばすことができていないことは残念な部分であった。そこに着目し授業を考えられて良かった。また共通事項が意識されており、子どもにとって良いものになっていた。

今後、なぜ中学校で美術を行うのかを考えなくてはならない。生涯にわたり美術に関わることや日本の文化、海外の文化の両方に触れ、自分の価値観をもつことは大切である。

◇研究協議の柱に即した協議（グループ協議）

Ａ　美術のもつ力や、学習する意味を、指導者は強く意識し伝えていかなくてはいけない。思考力や豊かな情操を養う、バランスのとれた授業展開を模索していくことが大切である。

Ｂ　鑑賞の評価ではワークシートでどのようなことを学び、感じたかを記入させる必要がある。鑑賞のよさを味わうプロセスや、評価の難しさを意見交換できてよかった。

Ｃ　自分や他人の価値観を知り、それを知ることの楽しみを教えていくことが大切である。感じ取る力や選ぶ能力を養う授業づくりを行う。

Ｄ　子どもが主体的に動き、指導者も動かすというしかけを工夫する。授業の発展性の工夫や授業が少ない中で、どう子どもたちが表現するかサポートする必要がある。

Ｅ　抽象表現の評価は難しい。目標設定をはっきりとさせることが大切ではないか。今回の提案では、“もっと知りたい”と思う子どもの感性に触れることができていた。２・３年での発展が楽しみ。

Ｆ　鑑賞の力が深まるということは、“何をどう感じるか”考えることではないか。何を美しいと感じ、どのように表現したいのかをスケッチやノート、授業の様子からみとっていく。

Ｇ　文章のうまさではなく、文章内にあるキーワードから鑑賞の能力をみとることができるようなワークシートを制作することが大切だと思う。

Ｈ　鑑賞の際、最初に作者や作品についての知識を学ぶと作品を見たときに感じるものの幅が狭くなってしまう。知識を学ぶ前に作品をみることで、子ども達から様々な意見がでるのではないか。

◇まとめ

学習指導要領が改訂され３年目となるが、もう一度ここで指導要領の再確認をする必要がある。共通事項として資質や能力をどのように組み合わせ見通していくか、思いをどう伝えていくかを、授業を組み立てていくうえで考えることが重要である。３年間の子どもの成長を考え、指導計画を見直すことが大切である。